

# 「守る」のではなく 「守られている」 忘れてはいけない、 自然への感謝



ブナの木は落葉広葉樹であり、落ち葉が重なることで、地面がとてもしゃべりやすくなる。森林浴に出かければ、やさしく降り注ぐ木漏れ日と、フカフカのじゅうたんのような歩き心地に癒される。

その柔らかさが、山に保水力を与

える。水を貯え、洪水や地滑りを防ぐことから、ブナ林は「緑のダム」、「天然のダム」とも呼ばれている。

森にとって重要な役割を果たすブナ林だが、高度経済成長期の1950年代から全国で大規模な伐採が始まる。杉は50〜60年でおよそ30メートル

ルまで伸びるが、ブナは成長が遅く、完全に伸びるまで200年以上かかるといわれている。原生林を伐採すれば、元に戻そうとしても人間の範疇をはるかに超えており、とても手に負えない。森の水源を失うことにつながり、野生動物への影響も懸念される。

ブナ林伐採の波は、花巻市にも押し寄せる。どうにかして保護しなければ。有志たちが集まり、「花巻のブナ原生林に守られる市民の会」が結成された。立ち上げ当初から事務局長を務めるのが、今回紹介する望月達也さんだ。

会では官民一体となった保護活動を目指した。何とか花巻市と岩手県の協力を取り付けたい。だが、官公庁に出向くのは平日に限定される。また、当時は「運動」といえば「国に逆らう」ととらえる人たちも少なくなかった。このままでは会社に迷惑をかけてしまう。望月さんは定職を諦めて、アルバイトをしながら活動を続けた。

活動を始めてから7年後、ついに花巻市のブナ林約2500haの永久保存が確約される。「花巻市と岩手県、議員さんも協力してください、行政対行政に持ち込めたのが大きかった」と望月さんは振り返る。国指定がない原生林が保存されるのは、全国的にみても珍しいという。

定職をなげうってまでも、ブナ林保護に取り組んだ望月さん。その情

熱ほどのようにして育まれたのか。

山梨県生まれで花巻市育ち。東京でグラフィックデザイナーとして働いていたこともある望月さんに、転職が

おとずれたのは20代半ばのことだ。

東京暮らしにピリオドを打ち、花巻市でライブハウスを営んでいた望月さんは、タクシーの運転手に転職し貯金に励む。理由は外国に行きたかったからだ。日本とはスケールの異なる、壮大な自然に触れてみたい。選んだ先はアラスカ。2年で目標額を貯めて、飛行機に乗り込んだ。

アラスカの季節はほとんどが冬。春夏秋は6月から8月までの3か月に凝縮されている。短い期間に命を燃やそうとする植物、活発に動き出す動物たち。四季の美しさ、儂さが胸に響いた。

もうひとつ印象的だったのが、動物との向き合い方だ。熊には個体管理がされており、出没したり、目撃情報があったりしても日本のようにむやみに騒がない。「何か起きたときには、熊が悪いのではなく、人間が悪い」ととらえるような考え方なんです。動物たちが生息する巨大な国立

花巻南温泉峠を奥へと進んでいくと、大迫力の山々と豊沢ダムが見えてくる。この地域が花巻温泉郷県立自然公園に指定されている。写真は9月下旬の自然公園内の山々。黄色っぽくて、モコモコとしているのがブナ林。ブナの葉は、淡い緑色から深緑へと変わり、9月頃から黄色に変化する。





15年以上続いている人気イベント「子ども冒険キャンプ」の様子。ブナの木に聴診器を当てたり、巨木の前で記念写真を撮ったりしているのが「サバイバルキャンプ」。海水浴を楽しんでいるのが「夏の冒険キャンプ」、雪遊びをしているのが「冬の冒険キャンプ」。「枯れ木の絵を描いた登校拒否の子が、キャンプ後、枯れ木に一枚緑色の葉を描いたんです。すごく嬉しくて、やりがいを感じた瞬間でした」と望月さん。



三角のかたちをした茶色い実がブナの実。成熟するとはじけて地上に散布される。中身は生食が可能で、洗みが少なく美味。タンパク質や脂肪分が豊富で、山の動物たちの栄養源になっている。



花巻温泉郷県立自然公園の保護管理員を務める望月さん。年間90日は自然公園内をパトロールする。熊があらわれた跡はないか、ゴミなどが投棄されていないかチェック。望月さんは山野草にも詳しく、時々立ち止まっては、わかりやすく説明してくれる。



いているときだった。

「花巻のブナ原生林に守られる市民の会」を始めてからも、望月さんの子どもたちに対する優しい眼差しは変わらなかった。会の活動の一環として、子どもが自然に親しめるイベントをスタート。「子ども冒険キャンプ」と題し、小学生を対象に季節ごとに趣向を変えて開催している。水生生物の調査や、海で魚釣りをし

て食材を調達するサバイバルキャンプ、地域の伝統食や縄ないの学習、雪遊びなど。子どもが楽しむのはもちろん、キャンプから帰ると家の手伝いをするようになる子も多く、親にも喜ばれている。

望月さんは現在、県立自然公園の保護管理員を務めながら、「花巻のブナ原生林に守られる市民の会」の事務局長を続けている。さらに、東日本大震災後は被災地で毎週火曜と水曜に畑づくりのボランティアをしている。「土いじりには、セラピー効果があるといわれています。突然環境が変わってしまい、仮設住宅で引きこもりがちの方々に畑づくりをしてみたら、少しでも元気になると思います。震災後からずっと続けていて、数えてみたら450日くらいになりました。ボランティアや支援団体が少なくなっている今こそ、重要性を感じています」。

最後に、望月さんはこんなメッセージを送ってくれた。それは、日常の中で、私たちが忘れかけていたことでもある。

「先進国と呼ばれる国々は、利便性

公園にはレンジャーがいて、動物のチェックから園内にいる人間まで管理。その姿が頼もしくて、漠然とですがこんな仕事に就けたらいいなと思いました」。

大自然を経験した望月さんは、帰国してから、より自然に近い暮らしへとシフト。インディアンが利用する三角形の移動式テント「ティピー」に住まいを移す。仕事面でも変化があった。盛岡市でタクシー運転手しながら、「いきいき牧場」の管理をボランティアで手伝う。

「いきいき牧場」とは、盛岡のわんこそば家「東家」の故馬場勝彦氏が、「障がい者も老人も大人も子どもも喜びをもつて暮らす土に根ざした健康な共同生活体」との思いから立ち上げた牧場。畑を耕し、鶏や捨てられたペットたちを飼い、障がいのある人たちと共に働く。「障がいのある子どもたちが純粋で、とても可愛かったですよ。楽しかったですね」。

その後、花巻でも同様の取り組みをしたいとの話をもらい、望月さんは立ち上げに協力する。ブナ林保護の話が舞い込んだのは、その会で働

を求めるあまり、自然をないがしろにしてきた面があります。自分たちにとっては都合が良くても、地球にとっては相当な負担がかかるわけです。対して、インディアンやアフリカの民族といった先住民の人たちは、お金はそれほど持っていないかもしれませんが、地球に迷惑をかけずに生きています。私たちは自然や地球に生かされているわけですから、もっと感謝の気持ちを抱いてもよいのではと思うのです。そんな思いがあり、会の名を『ブナ原生林を守る』ではなく『守られる』にしました。今の日本で、自然や地球に感謝の気持ちを持っているのはお爺ちゃんやお婆ちゃんたちです。子どもたちにはもっとふれあいを持ってほしいと思います」。

## 望月達也

1954年、山梨県生まれ。父の転勤にともない小学4年のときに花巻に転校し、高校まで暮らす。東京デザイナー学院に進学し広告会社に勤めた後、再び花巻へ。タクシーの運転手でお金を稼ぎ、ライブハウス経営にも挑戦した。その後、盛岡の「いきいき牧場」と花巻の「手をつなぐ親の会」で農場管理のボランティアを務める。現在は花巻温泉郷県立自然公園保護管理員、他、花巻市環境マイスター、ブナ帯調査室クマゲラ研究班代表、子ども自然クラブ、岩手県環境アドバイザー、被災地支援など活動多数。